

18	豊田	若園小学校	うちやま ゆうすけ 氏名 内山 優佑
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

対話的なやりとりを通して、伝えたいことや聞きたいことを表現できる子の育成

— 6年 外国語科「My Best Memory」の実践を通して —

1 主題設定の理由

本学級の児童は、英語の授業に意欲的に取り組み、教科書にある表現を用いた基本的なやり取りには慣れてきている。一方で、自分の思いや考えを英語で伝える場面では、適切な表現が思い浮かばず、会話が途切れてしまう様子が見られる。アンケート結果によると、「授業で教科書のフレーズを使って自分の伝えたいことについて相手と対話できる」と答えた児童は33人中26人であった。【資料①】一方で、「何を聞けばよいか分からないことがある」という質問に対して「いつもある」と「ときどきある」と答えた児童は合わせて30人であった。【資料②】

また、「知っている英語なのに思い出さなかったことがある」と答えた児童は27人であった。これらの結果から、多くの児童は教科書にある表現を用いた基本的なやり取りはできるものの、既習表現を活用して対話を広げたり、自然なやり取りを続けたりすることに課題があることが分かった。つまり、「伝えたいことがあっても、適切な表現が思い浮かばず、会話が続かない」という課題を抱えていると考えられる。そこで本単元では、自分の経験や考えを伝える際に既習表現を活用しながら質問や応答を加える活動に取り組んだ。相手の経験や考えについても質問しながら理解を深めることで、やりとりを広げられるようにした。こうした活動を通して、児童が「自分の言葉で伝えられた」「相手とやりとりできた」という実感をもち、自信をもって英語で表現しようとする態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

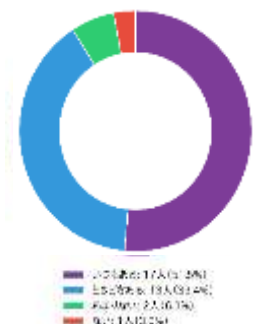
【資料①】 アンケート結果その1

授業で教科書のフレーズを使って自分の伝えたいことについて相手と対話ができる



【資料②】 アンケート結果その2

何を聞けばよいか分からないことがある



2 目指す子ども像

相手と質問や応答をしてやりとりを広げ、自分の伝えたいことや聞きたいことを英語で表現しようとする児童の育成

3 研究の仮説と手立て

- 【仮説1】教科書に示された基本表現に質問や応答を加えてやり取りの形にし、さらに対話の見通しをもたせる活動を取り入れることで、児童はやりとりを発展させ、英語でやりとりができるようになるだろう。
- 【手立て1】**例文に対話に発展させる表現活動**
教科書の「Enjoy Communication」に示された例文に既習の質問や表現を加え、それらを用いた活動を取り入れる。
- 【手立て2】**対話の見通しをもたせる事前の思考活動**
ペアでの対話活動の前に、個別および協働で考える時間を設定し、相手の発表内容を基に質問を考え、その返答もあらかじめ整理することで、児童に発話の見通しをもたせる。

【 仮説 2 】 Small Talk を継続的に取り入れて既習表現を繰り返し、活用する機会を確保するとともに、伝える相手と目的を明確にしたコミュニケーションの場を設定することで、児童は伝えたいことや聞きたいことを英語で表現しようとするようになるだろう。

【手立て 1】 既習表現の可視化と蓄積による Small Talk の充実

Unit1 から継続的に Small Talk を取り入れ、対話を広げるための既習表現をレベルアップフレーズとして板書等により可視化しながら蓄積し、いつでも参照・活用できるようにするとともに、実際のやりとりの中で使用することで、表現の定着と活用ができるようにする。

【手立て 2】 表現の可視化と比較による振り返り

Small Talk で用いた表現を継続的に記録・蓄積し、単元の導入時と終末のやりとりと比較する振り返りを行うことで、児童が自ら表現の広がりを実感し、既習表現を主体的に活用できるようにする。

【手立て 3】 相手と目的を明確にしたコミュニケーション場面の設定

児童の生活経験に基づき、身近な存在である伝える相手（お世話になった先生）と目的（小学校での思い出を英語で伝える）を具体的に設定し、実際に相手に伝える場を設ける。これにより、英語で伝える必然性をもたせ、既習表現を活用しながらやりとりを発展させることができるようにする。

4 抽出児童の設定

＜児童 A＞

学級では、誰とでも仲良く関わり、男女分け隔てなく接しようとする姿が見られる。しかし、外国語の授業になると、表現の仕方が分からずコミュニケーションがとれないときがある。本研究を通して、聞きたいことや知りたいことを進んで英語で質問したり答えたりしてコミュニケーションがとれるようになってほしい。

5 実践とその成果

（1）仮説 1 手だて 1 例文を対話に発展させる表現活動

事前のアンケートや授業の様子から、既習表現を実際のやりとりで活用することに課題が見られた。そこで、教科書の例文に質問や応答を付け加える活動を取り入れ、既習表現に関連付けながら対話を広げられるようにした。本単元では、「Enjoy Communication」の例文【資料③】をもとに、「How was your ～?」「Where did you go?」「What did you do?」などの既習表現を活用し、例文を対話形式へと発展させる活動を行った。

Unit7 の定型文をよりよいやりとりをするためには、どのようにすればよいかを児童に問いかけたところ、児童から、「質問を加えて対話にするとよい」といった意見が出された。そこで、児童は既習表現を活用し、一文ごとに質問や応答を付け加えながら、対話へと発展させていった。【資料④】例えば、「I went to Todaiji Temple.」に対しては、「どこへ行ったのかをたずねればよい」という考えから、「Where did you go?」という質問表現が挙げられた。また、「It was old and great.」に対しては、

【資料③】 教科書の例文

A: What's your best memory?
B: My best memory is our school trip.
We went to Todaiji Temple.
It was old and great.

【資料④】 対話に発展させた対話文

A: What's your best memory?
B: My best memory is our school trip.
A: How was your school trip?
B: It was old and great.
A: Where did you go?
B: I went to Todaiji Temple.
A: Anything else? What did you do?
B: I (①) (②)

「東大寺へ行った感想を聞けばよい」という考えから、Unit3 で学習した「How was your ～?」という既習表

現を用いる意見が出され、会話を広げていった。さらに、その後も対話を続けるためには、どのような質問をすればよいかを考えた。すると、これまでの Unit で積み重ねてきた表現の一つである「What did you do?」や「Anything else?」などの質問表現を加えながら、会話を広げることができた。

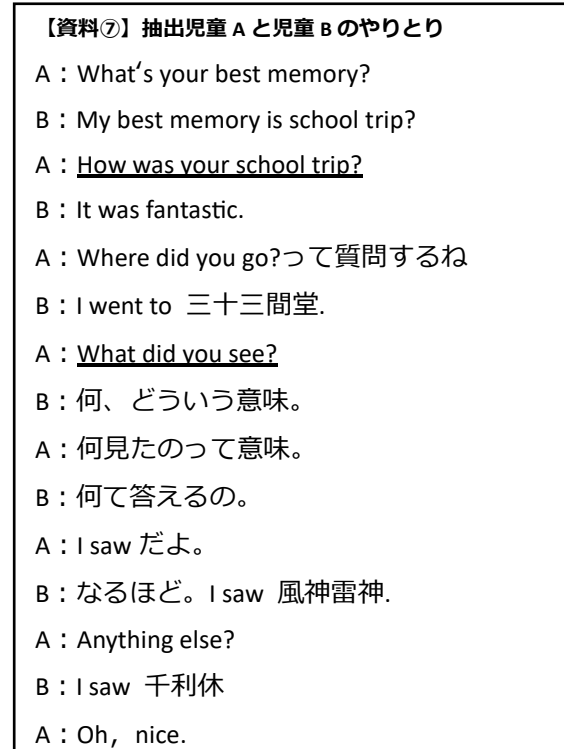
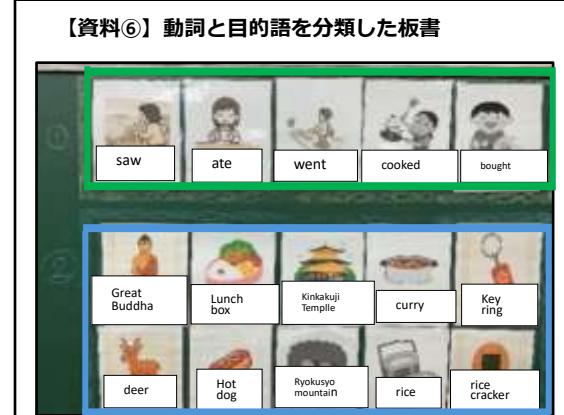
その結果、児童は既習表現を用いて例文に質問を付け加えたり、やりとりを継続したりする姿が見られた。また、「How was your ~?」「What did you do?」など、これまでに学習した表現を関連付けながら活用し、対話を広げようとする様子が見られた。

(2) 仮説1 手立て2 対話の見通しをもたせる事前の思考活動

ペアでの対話活動では、質問や返答をその場で考えることが難しく、会話が途切れたり、一往復で終わったりする様子が見られた。そこで、対話活動の前に、個別で質問を考える時間と協働で返答を考える時間を設定し、見通しをもってやりとりできるようにした。まず、児童はタブレットで作成した発表ノート【資料⑤】をペアで交換し、相手の内容を基に、手立て①で学習した既習表現を活用しながら質問を考えた。次に、お互いの質問を伝え合い、その返答を個別で考える時間を設けた。児童は自分の経験を思い出しながら、相手からの質問にどのように答えるかを考えた。分からない単語や表現についてはペアで確認し合った。さらに、返答を考えやすくするため、動詞と目的語を分類して提示した。【資料⑥】児童は提示された語句を組み合わせながら、自分の経験に合わせて英文を組み立てていった。

相手の発表内容をもとに質問を考える活動では、多くの児童が手立て①で学習した既習表現を活用しながら、事前に考えた質問をもとにやりとりを行い、相手の経験をより詳しく聞き出そうとする様子が見られた。返答を考える場面では、「I saw a temple」「I bought a key ring」など、動詞と目的語を組み合わせて表現する児童が増え、具体的に自分の経験を伝えようとする姿が見られた。さらに、A 児は「How was your ~?」に加えて、「What did you see?」などの既習表現を活用しながら、相手の発表内容をさらに詳しく聞き出そうとする姿が見られた。また、ペア児童もそれに応じて具体的に応答し、一往復で終わらず質問と応答を重ねる姿が見られた。【資料⑦】

これらの変容は、事前に質問と返答を考える時間を設けたことで、児童が発話の見通しをもつことができたためであると考えられる。また、動詞や目的語の提示やペアでの確認活動が、表現を考える際の足場かけとなったことも要因であると考えられる。



(3) 仮説2 手立て1 既習表現の可視化と蓄積による Small Talk の充実

児童が既習表現を継続的に活用できるようにするためには、表現を繰り返し使用する機会が必要であると考えた。

そこで本実践では、Unit7に限らず Unit1 から継続的に Small Talk を実施し、対話を広げるための表現を繰り返し提示した。また、新たに使えるようになった表現を板書に整理し、児童が活用できるようにした。【資料⑧】 フレーズについては Small Talk で児童が使用していたフレーズを全体の前で紹介したり、ALT と担任とのデモンストレーションにおいて既習のフレーズを提示したりして、学級全体で意味の確認や言い方の練習を行った。Small Talk を行う前にレベルアップフレーズを全体で確認することで意欲的に使おうとする姿が見られた。

A 児は、継続的な Small Talk で既習表現を蓄積していったことで、単元終末には「What did you do?」「Where did you go?」「Anything else?」など複数の質問表現を活用しながら対話を広げ相手の発言を引き出そうとする姿も見られた。【資料⑨】

これらの変容は、Unit1 からの継続的に行ってきた Small Talk で既習表現に繰り返し触れ、それらを実際の対話の中で活用する機会を積み重ねてきたためであると考えられる。

(4) 仮説2 手立て2 表現の可視化と比較による振り返り

児童が自分の表現の広がりを実感できるようにするため、Small Talk で使用した表現を発表ノートに記録させるとともに、Unit1 から Unit7 までの表現を一覧として蓄積した。また、1 Unit に3回ある Small Talk のトピックは一般的に別の内容だが、本単元においては導入時と終末時を同じトピックとした。そして、単元導入時と終末の Small Talk の振り返りを同一ページに記録し、比較できるようにした。【資料⑩】

その結果、児童は左右の記述を見比べながら、「使える表現が増えた」「質問の種類が増えた」など、自身の変化を実感する様子が見えた。A 児も、1 回目の Small Talk では「What do you like?」「Anything else?」のみであったが、3 回目には「What did you eat?」「What did you do?」

【資料⑧】 small talk を通して蓄積した表現

レベルアップフレーズ	
質問 答え・反応	
Do you (like) ~?	What can you see? / I can see ~
Are you good at ~?	How about you? (And you?)
Can you ~? / Yes, ~ No, ~	Anything else?
What ~ do you like? / I like ~	How do you say ~ in Japanese?
What's that?	What can we do? / We can ~
Why? / Where? / When? / Who?	I enjoyed ~ing
How was your ~? / It was ~	What did you do? / I したこと
	How was ~? / It was 感想
	Where (did you go)? / I went to 場所
	Was it 感想? / Yes/No

【資料⑨】 抽出児 A の Small Talk

How was your New Years Day?
A : How was your New Years Day?
B: It was fantastic.
A: Where did you go?
B: I went to Atsuta shrine.
A: What did you do?
B: I ate からあげ.
A: Anything else?
B: I bought おまもり.
A: Oh, nice.
B: How about you?

【資料⑩】 Small Talk の振り返り

What do you like about school?	
【1回目】	【単元終末】
覚えた表現	覚えた表現
What do you like?	What did you eat?
Anything else?	Why?
今回のスモールトークは単語や文を全然使えなかったです。次はもっとちゃんと話せるように言葉を選びたいです。	Anything else?
	What do you like?
	What did you do?
	What did you do?が言えるようになりました。何食べたのっていう質問に I ate デザートって答えられました。 Anything else ? を使って長い会話を続けられました。

「Why?」など複数の質問表現を使用できるようになっていた。振り返りには、「“I ate デザート”ってこたえられました」や「“Anything else?”を使って長い会話ができた」と書き、二つの振り返りシートを見て、自身の成長を実感していた。【資料⑩】

この変容は、Small Talk で使用した表現を継続的に蓄積し可視化したことで、児童が自分の表現の広がり把握できるようになったためであると考えられる。また、同一トピックでの比較という振り返りの工夫により、「できるようになったこと」が具体的に認識され、使える表現の広がりややりとりの深まりを実感しやすくなったことも要因であると考えられる。

（５） 仮説２ 手立て３ 相手と目的を明確にしたコミュニケーション場面の設定

児童が既習表現を実際のコミュニケーション場面で十分に活用できていないことの一因として伝える相手や目的が明確でないということが考えられた。そこで、伝える相手と目的を具体的に設定し、英語で伝える必然性のある場を設けることで、既習表現を活用して自分の経験や思いを表現できるようになると考えた。

具体的には、学級活動で作成した「卒業までにやりたいことリストベスト 33」の中の「お世話になった先生に感謝を伝えたい」という思いを取り上げた。これにより、児童は伝える相手を具体的に意識するとともに、「英語で思い出や感謝を伝えたい」「学習してきた英語表現を使って成長した姿を見せたい」という思いをもち、英語で思い出を伝える活動へとつながっていった。単元終末に設定した「思い出を伝える会」では、児童は伝える相手を意識しながら、これまでの学習で身に付けた表現を用いて、自分の思い出を英語で伝える姿が見られた。



A 児は、修学旅行の思い出について先生に伝えた際、「I went to Nara.」「I bought a key ring.」などの既習表現を用いて自分の経験を伝えることができた。また、先生からの「Where did you go?」「What did you buy?」などの質問に対しても応答しながら、自分の思い出について具体的に説明する姿が見られた。【資料⑪】

これらの変容は、伝える相手と目的を明確に設定したことで、児童が「相手に伝えたい」という思いをもち、これまでの学習で身に付けた表現を活用しようとしたためであると考えられる。また、実際に先生へ思い出や感謝を伝える場を設定したことで、英語で伝える必然性が生まれ、単元を通して意欲的に学習を積み重ね、自分の経験を主体的に表現しようとする姿につながったと考えられる。

6 研究の成果と課題

（１）成果

【仮説１】について

仮説１では、教科書の基本表現に質問や応答を加える活動や、対話前に質問と返答を考える活動を取り入れたことで、児童が既習表現を活用しながらやりとりを発展させる姿が見られた。

また、A 児は、当初は表現が分からずコミュニケーションが途切れる様子が見られたが、単元を通して「How was your ～?」「What did you see?」などの既習表現を活用しながら質問する姿が見られるようになった。さらに、「I saw a temple」「I bought a key ring」など、具体的な内容を付け加えて応答することができおり、既習表現を活用しながらやりとりを継続する力が高まったと考えられる。

【仮説2】について

単元終了後のアンケートでは、「以前に比べて英語を話すときに自信がついた」「少し自信がついた」と回答した児童は33人であった。【資料⑫】また、その理由として、「使える英語の表現が増えたから」という回答が多く見られた。【資料⑬】さらに、「教科書のフレーズ以外を使って、自分の伝えたいことについて相手と対話できる」と回答した児童は29人であった。【資料⑭】このことから、児童は既習表現を活用しながら、自分の伝えたいことや聞きたいことを英語で表現し、相手との対話を行うことができるようになってきたと考えられる。

A児は、振り返りにおいて①「“What did you eat?” “What did you see?”などの質問を自分で考えて使えるようになりました」②「beautifulなどのいつもは使わないような英語を使えました」「何を買ったのって聞かれたときにキーリングとちゃんと答えられました」と記述しており、使える表現の広がりを実感している様子がうかがえた。【資料⑮】

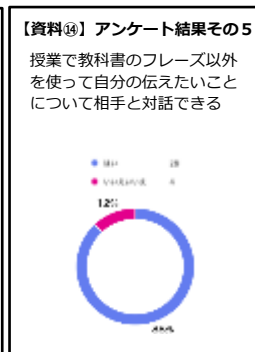
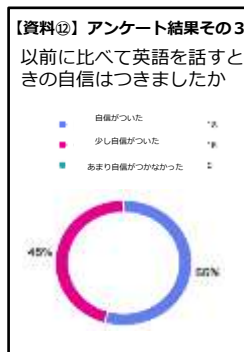
さらに、A児は、4月当初のアンケートでは、「教科書のフレーズを用いた対話」「教科書以外の表現を用いた対話」「自分の考えを英語で伝えること」の全てに「いいえ」と回答していた。しかし、単元終了後には全ての項目に「はい」と回答しており、英語に対話し、自分の考えを伝えることへの肯定的な意識の高まりが見られた。【資料⑯】

この変容は、継続的な Small Talk を通して既習表現に繰り返し触れたり、振り返りによって使えるようになった表現を実感したりしたことに加え、伝える相手や目的を明確にしたコミュニケーション活動に取り組んだことで、英語で表現する自信を高めることができたためであると考えられる。また、A児は自信がついた理由として「ペアで質問をし合ったから」と記述していた。【資料⑯】児童自身が対話活動を自信の向上要因として捉えていることから、相手とのやりとりを繰り返す経験が、英語で表現することへの自信の向上につながったことが分かった。

以上のことから、本研究で設定した手立ては、対話的なやりとりを通して、伝えたいことや聞きたいことを表現できる子の育成に有効であったと考えられる。

(2) 課題

今回の実践では、多くの児童が既習表現を活用して自分の伝えたいことを表現する姿が見られた。一方で、相手の話を受けて聞きたいことを主体的に質問し、対話を広げる姿には個人差が見られた。今後は、全ての児童が相手とのやり取りの中で、自ら質問を生み出しながら対話を広げられるよう、指導方法をさらに工夫していきたい。



【資料⑮】 児童Aの振り返り

①6/8 時の振り返り	②7/8 時の振り返り
what did you eat?や what did you see?などの 質問を自分で考え、使える ようになりました。 たまになんて言うのか分から ない時があるんですけど、 覚えておきたいです。 何を買ったの?の返しがまだ 分からないので、覚えたいです。	beautifulなどのいつもは 使わないような英語を使えました。 anything elseと言われた時に 何を言えいいのか分からなかった のでちゃんと答えられるようになりました。 何を買ったのって聞かれた時にキーリングと ちゃんと答えられました。

【資料⑯】 児童Aのアンケート結果

- | | |
|--|----------------|
| 1 英語は好きですか。 | 「いいえ」 |
| 2 英語の授業で相手とコミュニケーションをとることができますか。 | 「はい」 |
| 3 英語でなんて言えいいのかわからないことがありますか。 | 「はい」 |
| 4 授業で教科書のフレーズを使って自分の伝えたいことについて相手と対話ができますか。 | 「はい」 |
| 5 授業で教科書のフレーズ以外を使って自分の伝えたいことについて相手と対話ができますか。 | 「はい」 |
| 6 自分の伝えたいことを英語で相手に伝えられますか。 | 「はい」 |
| 7 以前に比べて英語で話すときの自信はつきましたか。 | 「はい」 |
| 8 自信がついた理由は何ですか。 | 「ペアで質問をし合ったから」 |